

『高齢者介護施設の現場から見たロボット技術への期待』

石田健一（社会福祉法人新生会 有料マチュアホーム 穂和の園）

私の勤める法人は昭和 32 年（1957 年）に設立された高齢者を対象とした高齢者複合型施設を有する法人です。そして、私自身が高齢者介護の現場に携わるようになり、今年で 25 年になります。現在の職場でもあります新生会に入職し、22 年が経ちました。22 年前、私は特別養護老人ホーム榛名憩の園に配属され、憩の園は大部屋(4 人)中心で個室が十部屋程度ある 130 名定員の特養ホームでした。現在の憩の園は平成 12 年にユニットタイプとして改築されましたが、私が就職した頃は昭和 44 年に開園し昭和 48 年に増築された建物で、大変設備も古く、特別養護老人ホームと言う特徴から体が不自由で、寝たきりの方や車椅子利用者が大変多い施設でした。

当時使われていた福祉機器の中で、自立支援のための器具と言えば、車椅子や歩行器などの移動動作を補助する物と、食事のために改良されたスプーンやフォークなどの自助具が中心でした。しかし、それらの福祉機器も企画が統一されており、お一人おひとりにあった福祉機器も少なく、「もう少しこの所がこうだったら。こんな動きをしてくれたら。」と思われる機能に欠けているものが多かったと思います。

そこで、私自身が経験したこれまでの介護現場の中で、特に印象に残っている高齢者自立支援に向けた取り組みのケースを、2 例ほど挙げさせていただきます。

まずお一人目は男性 A さんです。この方は、当時 50 歳代で入居のきっかけも脳梗塞に伴う後遺症が原因でした。当時 A さんは言語障害と上下肢に麻痺があり、言語は「あれ・これ・そう」程度の発語で、歩行はゆっくりと右足を引きずるように歩くことができました。そして、両上肢は麻痺が残り、ご自分では上手に口まで食事を運ぶことが出来ないため、食事の時は私達ケアワーカーの全介助の状況が続いていました。当時の憩の園では、一人の介助者(ケアワーカー)が同時に 2 人から 3 人の利用者の介助に携わることも多く、そのため、ケアワーカーが A さん以外の方の介助を行っている時、A さんは待ち切れずに自分で食べようとして、顔を食器に近づけて口を使って「犬食い」をすることが度々でした。おそらく、A さんも決してそのような食べ方をしたかった筈もなく、「自分の手が動かせれば…」と、残念に思っていましたのだと思います。幸いにも、その後 A さんはリハビリに励み、苦勞しながらも右手でスプーンやフォークを持って食事が出来るようになりましたが、もし、A さんの上肢の機能が回復しなかったならば、その後 10 年以上もケアワーカーのペースでの食事に、食べることの楽しみも減ってしまったのではないのでしょうか。

さて、次の方は女性 B さんです。当時 B さんは 70 歳代でした。50 歳代で多発性硬化症と言う病を患い、両下肢のしびれや歩行障害が進行し、現在私の所属している終身介護型の有料ホーム（穂和の園）に入居された時には症状が進行し、全く歩くことができず、移動には車椅子を使用していました。また、排泄面は何とか手すりにつかまって立位が保持できたため、トイレ介助を行っていました。しかし、更に症状が進行すると、立位保持も難しくなり、立っている最中に両膝が『ガクッ!』と折れ曲がり、尻もちをつく危険性が

増して来ました。そのため、介助時はその都度ケアワーカーは急な膝折れに対応する姿勢は保ちつつも、Bさんも体格が良いため小柄な女性ケアワーカーでは介助が困難な場面が増えてきました。そのため、Bさんに尿器やおむつ、ポータブルトイレなどの使用を勧めましたが、Bさんは「トイレでなければ排泄したくない。」と強く希望されました。しかし、いよいよご自分でも危険を感じるようになり、排泄感があるにもかかわらず、最終的には渋々おむつ着用を納得されました。当時、Bさんのカンファレンスでは、Bさんの希望に沿った排泄介助が毎回話し合われました。しかし、Bさんの下肢の機能低下と夜勤帯やケアワーカーの人員配置の難しさからトイレ介助困難との結果になってしまいました。

私達が勤める高齢者の介護施設では、こう言った事例はよくあることで、他の介護施設でも当たり前のこととして、利用者と介助者はこのような日常を過ごしています。この2例に限らず、サービスを提供する私達は「如何に利用者お一人おひとりが、その人らしく満足の行く日々を過ごされるか。」を考えてお世話させて頂いております。その当時、もし、「Aさんの様に上肢に障害を持っている方が、自分の思う様に視線だけで食事介助をしてくれるロボットがいてくれたら。」もし、「Bさんの様な人に立位を補助してくれる機能のロボットが使えたら。」と、それらロボットの開発と実用化を熱望しておりました。

特に、高齢者施設を利用される方々は長い人生を歩んで来られ、加齢と共にご自身の体力の低下をひしひしと実感しつつ毎日を過ごされています。そのため、少しでも自分の力で、自分一人で、『まだ出来る。』と喜びを感じられたならば、それが生きる糧となり、QOLの向上と共に、生き甲斐に結び付くのではないのでしょうか。

昨今、新聞やテレビ等でも取り上げられている、国や地方行政の介護ロボット普及推進事業は大いに歓迎されるもので、同時に介護ロボットの進化も企業側の努力の結果、格段に利用者のニーズや自立支援に向けた開発が進んでいます。そして、それらの介護・自立支援ロボットの導入により、介護現場で働く介護者の人手不足と介護負担の軽減が期待されます。しかし、開発の進むロボット技術も、現在介護施設にあまり導入されていないのも事実です。その理由の一つには、利用者側の介護ロボットに対する知識不足と、コストの高さにもあります。また、介護現場では、「介護は人がするもの」と言った意識もあるため、介護施設では未だに「マンパワーの活用」が中心となっています。つまり、「人の手」に代わる温もりのあるロボットへの期待と、活用するための現場の意識改革が必要と感じています。

最期になりますが、今後の更なる介護・自立支援ロボットの開発と実用化を望むと同時に、介護ロボットを開発する側である企業と、実際に介護ロボットを必要とする利用者側のニーズを結びつけ、介護支援ロボットがより実生活に身近な物となるためには、行政の更なる役割が重要になっていると感じております。

寄稿日 2013年7月9日